

国際森林年記念会議

「生物多様性・観光と森林」



主催者挨拶 佐々木常務取締役

国際森林年への理解を深め、森林を守り・利用につなげることを目的として、7月21日(木)、愛知県名古屋市ウインクあいちで国際森林年記念会議「生物多様性・観光と森林」が開催されました。

冒頭、佐々木崇夫(ささき たかお)中日新聞社常務取締役の主催者あいさつに続き、皆川芳嗣(みながわ よしじ)林野庁長官があいさつに立ち、国際森林年の趣旨や震災復興に向けての考え方を説明し、「森に深く、長く、ふれあってほしい」と呼びかけました。続くトークショーでは、

登山家の田部井淳子(たべい じゅんこ)氏が、これまでの登山経験を紹介しながら、「ずっと日本の中にいると気がつかないが、日本の森は世界の国々に比べて、多様で感動するくらい美しく、世界に誇り得るものだ」と述べました。

また、自身が代表を務めるHATJ(日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト)では、東北応援プロジェクトとして、被災者を裏磐梯の五色沼の登山に招いたことなどを紹介しました。

中日新聞論説委員の飯尾歩(いひお あゆみ)氏をコーディネーターに、「愛知ターゲットの2020年、都市と森のあるべき姿」をテーマに、パネルディスカッションが行われました。5名のパネラーからは、観光と森林など他の分野との連携が重要、店舗敷地での植樹等身近な場所での植樹

活動の重要性、豊かな森が豊かな海を育む、日本はオーバーユースよりも森林に手をかけないアンダーユースが問題などと意見が出されていきました。

議論を踏まえて飯尾氏は、「日本人は名字に森、林、木、竹などがついていることが多い。人も森の住人。森との関係を取り戻すことが必要である」と締めくくり、677人の参加者から満場の拍手が贈られ、幕を閉じました。

今回のシンポジウムは、定員を大きく超える申し込みがあり、名古屋における意識の高さが感じられました。



開会スピーチ 皆川長官

プログラム

■第一部 トークショー「人が集う森へ～ツーリズムの視点から～」

田部井 淳子(登山家)
廣川 建司(雑誌「岳人」編集長)



トークショー

■第二部 パネルディスカッション

テーマ「愛知ターゲットの2020年、都市と森のあるべき姿」

コーディネーター

飯尾 歩(中日新聞論説委員)

パネリスト

香坂 玲(名古屋市立大学准教授)
田中 律子(女優)
小松 幸代(イオン(株)グループ環境最高責任者)
皆川 芳嗣(林野庁長官)
溝畑 宏(観光庁長官)



盛況だった会場



パネルディスカッション